

出現しX-P上心拡大を認めた(LVEF:23%)。現在は心移植の待機中である。(症例3)13歳9カ月男児, stage II。1988年(7カ月時)にMSで発見。化学療法施行中にLVEF:54%と低下し治療を中断。ADR総使用量:210 mg/m², THP-ADR:35mg/m²。2001年(13歳9カ月時), 先行する感染を期に心不全が出現(LVEF:26%)。内科的治療には反応不良で, 三尖弁形成+僧坊弁置換術を行ったが著明な改善をみずに死亡した。(まとめ)乳児神経芽腫の中でも過去には大量のアントラサイクリンを投与されている症例もあり, 長期間の心機能の評価が必要である。

第45回中国四国小児がん研究会

日時:平成16年4月17日(土)

会場:広島大学医学部 広仁会館

1. 頸部異所性胸腺の1乳児例

石橋 広樹, 嵩原 裕夫, 花岡 潤

(徳島大学病院小児外科)

症例は, 4ヶ月男児で, 38週, 出生体重1798gで出生した。1ヶ月健診で, 右下顎部の腫瘍を指摘された。生後4ヶ月時に当科紹介された。右下顎部に径4cmの弾性軟で, 境界不明瞭な腫瘍を触知し, MRI像では, 内部均一な腫瘍像を呈し, エコーにて頸部腫瘍と上縦隔の胸腺のエコーパターンが非常に類似していたため, 異所性胸腺と診断し, 摘出術を施行した。病理学的には, 正常胸腺組織であった。術後経過は良好であった。

2. 高度の心不全を呈した新生児肝血管腫の1例

谷 守通, 植村 貞繁

(独立行政法人 国立病院機構岩国医療センター
小児外科)

動静脈シャントのため高度の心不全を来した新生児肝血管腫の一例を経験した。肝左葉に70×46mm大の腫瘍があり, 動静脈シャントのため左肝静脈は著明に拡張, 栄養動脈の左肝動脈をコイル, 左下横隔膜動脈の枝, 腹腔動脈の枝をスポ

ンゼルで塞栓した。術後心不全は軽快したが, 再度動脈シャントの血流増加を認めたため摘出術を施行した。脾臓との境界が不明瞭で脾臓合併切除となった。全身状態不良例では塞栓術は有用である。

3. Infantile Fibrosarcoma の1例

市川 徹, 檜山 英三*, 山岡 裕明*

西村真一郎**

(広島市立舟入病院外科, 小児外科)

(広島大学附属病院小児外科*)

(同小児科**)

症例は出生時から右肩甲部の腫脹を気付かれていたが, 嚢胞として経過を見られていた。生後3か月時当科を紹介され受診。右肩甲部に径約4cmの腫瘍を認め, 肩甲骨に侵食していた。吸引針生検で診断つかず, 部分切除施行, 病理検査でinfantile fibrosarcomaと診断された。一期的全切除は右上肢の機能障害を来すと考え, 化学療法を行うこととし, 現在VAC療法施行中であるが, 腫瘍の縮小傾向は乏しい。

4. PETで診断された後腹膜 Castleman's disease の1例

吉田 篤史, 渡辺 泰宏, 土岐 彰

野田 卓男, 佐々木 潔, 谷 守通

王 仲秋, 伊藤 進*, 今井 正*

江藤 陽子*

(香川大学医学部 小児外科)

(同 小児科*)

症例は11歳の女児。平成14年7月よりCRP高値を指摘されるが, 原因不明であった。平成15年8月来院時も身体所見は正常だが, CRP 6 mg/dl, Hb 10.6g/dl, IL-6 9.1pg/mlであった。PETにて上腹部正中に局限する集積を認め, 後腹膜を開き腫瘍を摘除した。断面は黄白色で長径3cm大, 病理診断はCastleman's disease (hyaline vascular type)であった。